

## 現代宗教研究セミナー

### 天皇とは何か

——大嘗祭・即位の礼を中心に——

大野宣寿  
(神奈川県頑妙寺裡)

天皇の代が改まり、御代始めといいますか、皇位につくことに伴ういろいろな儀礼があります。

大きく言って、践祚、即位、大嘗祭（その後に続く節会を重要視していたので大嘗会とも言う）の三つの皇位継承儀礼がそれであります。

#### —

第一の践祚というのは、神器を受けて皇位を継承することです。本来これは中国の『礼記』から出ているようです。歴史的に見ると、践祚には二つあります。その一つは天皇が崩御の後、皇太子が皇位を継承するというもので、これが現在の一般的な践祚であります。それに対して、天皇がまだお元気なうちに譲位する、いわゆる受禅の場合であります。

初めは譲位という例はなかったようで、必ず天皇が崩御なさった後、皇位を継承することが一般化していました

す。ところが、譲位が行われるようになったのは、大化の改新のころ、女帝の皇極天皇（在位六四二～六四五 孝徳天皇の死後、重祚し斎明天皇（在位六五五～六六一）となる）が孝徳天皇（在位六四五～六五四）に譲位されたのが最初ではないかと言われております。

その後も女帝が皇位についた場合がありますが、これは天皇が崩御された後、いまだ皇嗣が決定しないとき、あるいは皇太子があまりにも幼少の場合、とりあえず女帝がしばらく摂政を行うか、あるいは践祚し、皇位につき、皇嗣が決定したとき、あるいは皇太子が成長した場合、ここで初めて譲位ということになります。

東大寺を建立し、大仏を造立した聖武天皇（在位七一二～七四九）の時代から、歴代の天皇はほとんど譲位という形で皇位を継承されています。

ところで本来、践祚と即位は同じ意味で使われていたようです。践祚と即位の意味、儀式内容が分離したのは、平安京に遷都した桓武天皇（在位七八一～八〇〇）の時代ではないかと言われています。  
践祚の中心になる儀式は、剣璽渡御の儀といって、神器の継承が行われ、草薙の剣と八咫瓊杵の曲玉が次の天皇に渡されます。

践祚の儀が行われた後、期日を定めて即位を行なうわけあります。

## 一一

第二の即位は、皇位を継承した事実を公にする儀式であります。

歴史学会では神武天皇は実在したのかといふことが疑問視されています。戦前は、神武天皇は紀元前六〇六年、大和の櫛原宮で即位したとされていました。ところが、我々が勉強した中学や高校の教科書には、「神武天皇」という字は、まず出てこないわけです。実際にいた天皇は、たぶん応神天皇あたりからではないか。それより前の天皇は、

ひょっとしたら実在しなかったのではないか。これは今後の研究にまたれるわけです。

即位の沿革を申しますと、この神武天皇以来、天皇が崩御されて直ちに皇太子が即位したという例はありません。すなわち、多くの場合、現在のようにしばらくの月日を経なければ即位しなかったようあります。

古代においては、天皇は直接自分の子に皇位を譲らない場合もありました。あるときは弟に譲ります。現在は皇室典範により皇位継承順位が決まっていますが、当時は弟に皇位を譲る場合がありました。

天智天皇（在位六六八～六七一）は大化の革新の功労者の一人である中大兄皇子と呼ばれた方ですが、その弟に、後に天武天皇（在位六七三～六八六）になる大海人皇子がいます。

天智天皇の第一皇子は『日本書紀』では即位を認めていませんが、明治三年になって在位を認めておくりなされ、弘文天皇（在位六七一～六七二）と呼ばれた大友皇子ですが、天智天皇はどうしても自分の子に皇位を譲りたい。このことを察した大海人皇子は、天智天皇の死に際し吉野に隠棲します。その後、大友皇子の方と大海人皇子方が争う壬申の乱が起ります。

壬申の乱の後、大海人皇子が天武天皇として即位するわけですが、その間、皇位はどうだったのかということになります。皇位は一日も空しかるべきからずということで、直ちに前天皇の任務を次の天皇が引き継ぐのが当然のことです。したがって、天智天皇が亡くなった場合、弟の大友皇子は隠棲しているので、第一子の大友皇子がとりあえず即位をし、皇位を継承したのが当然ではないかと考えられます。

そういうことで、まず践祚し神器を受けて、後に即位を行うことになってきたものと考えられます。

では、践祚の後どのくらい経過して即位を行なうか。当然のことながら、別に規定はありません。奈良時代においては、受禅して践祚、即位がほぼ同日の例が多いようです。時代が下ってまいりますと一ヶ月から四ヶ月、南北朝、室町の時代になってきますと一年以上たってから即位が行われております。世の中が乱れてくると、甚だしいのは室町

時代の後柏原天皇（在位一五〇〇～一五二八）の場合は践祚後二十一年過ぎてから行われております。ところが、豊臣秀吉、徳川家康という権力者が天下を平定して、世の中が平穏になってきますと、践祚から即位までわずか半月ぐらいになっております。

即位式は、昔はどういうことをしたのか。律令制度下の神祇令という祭祀に関する法令によりますと、まず天神地祇を祭ります。

当時は践祚と即位がほぼ同じことですので、その日には天皇は高御座（即位・朝賀など朝廷の儀式の際、大極殿または紫宸殿の中央に設けた天皇の座）につきます。

祭祀をつかさどる中臣氏が「天神の寿詞」を奏上します。

古代の即位式では、神璽の鏡と剣がたてまつられ、その後、天皇は即位の宣命を述べ、群臣の拝賀を受けます。

この即位式は、当然、一つには儀式という点からも考えられますが、一つには神事としての性格も持っていたわけです。

その後、中国との関係が深くなつてまいりますと、中国風の儀礼、文物、服制も取り入れられるようになり、即位式が次第に行われるようになつてまいります。

奈良時代の末期になりますと、中臣氏の「天神の寿詞」の奏上及び鏡、剣の捧呈は、大嘗祭の中に引き継がれていきます。すなわち、大嘗祭の中に即位式の性格が強くなつていったということが言えます。

践祚と即位の儀式が分離してくると、即位式に先立ち、朝廷から伊勢神宮あるいは重要な天皇の山陵に勅使が派遣され奉告するようになります。また、中国の影響によつて、中国風の服制が行われるようになります。このように中國風の儀式が江戸時代の末まで、ほぼ変化なく行われます。

ところが、明治の時代になりますと、すべて一新するという考え方から、即位式から中国風の儀礼を払拭します。

ここで、即位式の経費について少し述べてみたいと思います。

古代は、国々から納める租税で支弁されたと思われますが、その金額がどのくらいかということは、よくわかつておりません。

ただ、江戸時代の例をあげてみると、二代將軍徳川秀忠の娘和子——一説ではまさることも——は徳川幕府初期の不安定な朝幕関係の糾となり、後水尾天皇（在位一六一〇—一六二九）の女御として入内し、興子内親王を産み中宮となります。戒名を東福門院皇太后源和子といい、一般に東福門院と呼ばれていますが、この後水尾天皇と東福門院との間にできた興子内親王が、寛永六年（一六二九）十一月、譲位により皇女の身ながら七歳で明正天皇（在位一六二九—一六四三）として即位し、九百年間絶えていた女帝が再現されます。

ただ、バックに徳川幕府がいることで、それまでの天皇とは違い、即位式の規模も非常に大きかったと言われています。戦乱の世に即位した天皇とは違い、献上物も多く、幕閣も参列し、待遇はよほど手厚く、即位の費用は四千百四十石と言われています。江戸幕府の旗本は一万石以下でしたから、大身の旗本級であります。

それから、銀八貫外という記録があります。当時、銀の価値がどのぐらいあるかよくわかりませんが、江戸時代には、金貨すなわち小判は江戸を中心にして使われ、銀貨は京都、大阪を中心にして使われました。小判は量目に関係なく一枚二両ですが、銀貨は秤量貨幣で、重さをはかって、その価値を決めたようです。その後、何天皇のときかわかりませんが、七千石かけた例もあるようです。

次に、即位の日にちは、平安朝以降江戸時代までを見ると、一定していませんが、月では十二月、日には二十八日が最も多いわけです。ということは、十二月二十八日が一番多いということになります。

それから、十干十二支で言えば、癸卯と庚子の年が一番多く、なかなか十二支で見れば子の年、次いで卯の年が多くなっています。子は十二支の一番最初ですから、吉例とされたのではないかと思われます。

明治憲法下、皇室典範第十一條に「即位ノ礼及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」と定め、践祚の式、元号制定・即位礼などについて定めた「登極令」（明治四十二年公布、現行憲法施行とともに廃止）第四条には「即位ノ礼及大嘗祭ハ秋冬ノ間ニ於テ之ヲ行フ」と明記されております。すなわち、即位の礼及び大嘗祭は、諒闇といつて、一年間喪に服した後の秋と冬の間に、古来の伝統を重んじて、京都御所の紫宸殿において行われるわけです。

なお、新憲法下では、政教分離の建前から新皇室典範には大嘗祭の規定はありません。新皇室典範では、その第二十四条に「皇位の繼承があつたときは、即位の礼を行ふ。」とあり、新憲法第二条「皇位の繼承」でも「皇位は、世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを繼承する。」としか書いてありません。

即位の式場は、時代によつて場所が変わつてきております。上古、雄略天皇のときは泊瀬に壇を設けて即位しており、桓武天皇は天応一年四月三日（七八一）に受禪践祚し、同十五日に大極殿で即位の礼を行つております。しかし、平安時代中期以後は、費用の関係で大規模な即位礼は行われなくなり、中世以後は公家の衰えとともにますます簡略化され、後鳥羽天皇（在位一一八三～一一九八）のときは太政官序で行われ、室町時代に至つて、後柏原天皇からは紫宸殿で行われております。明治天皇の即位式も紫宸殿で行われています。

昔から「天使は南面す」と言われ、天皇は北を背にして南を向いております。京都には右京区と左京区がありますが、天皇が北を背にして南を向きますので、我々が地図を見るとき、右手のほうが左京区で、左手のほうが右京区になつています。

紫宸殿の前に「左近の櫻」と「右近の橘」がありますが、おひなさまのお節句のときに、この位置を左右取り違えて飾つてお家がござります。紫宸殿から外を見た場合に左手、すなわち向かって右手に「左近の櫻」、向かって左手に「右近の橘」が植えられています。

大内裏の朱雀門を入つたところに朝堂院があります。太政官の向かって左側の建物です。この朝堂院では即位・朝

賀・祝告朔（「祝」は通常読まない。古代、毎月朔日、諸司の進奏する公文を天皇が閲覧、後に、正月・四月・七月・十月の月初にだけ行われたが廃止）・外国使臣の引見など重要な儀式が行われたところです。この朝堂院の正殿が大極殿で、ここで即位の式が行われます。

左手の建物は豊葵院で、盛大な宴会を行う場所です。

時代の変遷に伴って、朝堂院の正殿である大極殿で行われていた儀式が、大極殿が焼失したり、いろいろのことがあって、後に太政官庁で行われ、最後に紫宸殿で行われるようになります。

即位式がある前には、伊勢神宮を初め重要な神社に即位の礼がある旨を奉告する奉幣使ほうへいしが派遣されます。これを由ての奉幣使と言います。このほか、天智、桓武、嵯峨、仁明、文德、醍醐、村上の七代の山陵には必ず奉告のための勅使が派遣されたと言われています。

### 三

第三に、皇位繼承に不可欠な儀礼とされてきたのが大嘗祭です。この大嘗祭についてお話する前に、新嘗祭からお話をしたほうが、ご理解いただけると思いますので、まず新嘗祭以前の稻の祭りについて、触れてみたいと思います。

縄文時代の晚期、弥生時代のころ水稻耕作が大陸から渡ってまいりました。これによって文化が非常に発達します。当時は稻の実りということが大切であったわけです。稻の豊凶によって、生命の持続、集落の維持に直接かかわってることから、春と秋にお祭りが行われます。そのお祭りも、五穀豊穣を祈願して春に行われる祈年祭よりも、新嘗祭の原形として神に豊作を感謝して秋に行われた収穫祭のほうがだんだん重要な意味合いを持つようになつてなりました。

収穫祭である新嘗祭は、次の年の稻の実りを保障する極めて現実的な目的を持つお祭りです。そこで、収穫後間も

ないある一日、夜を徹して、その地域の首長が新しい穀物を捧げて、神とともにその穀物を食べるという儀礼が各地域で行われていたわけです。

後に、小国家——例えば、最近問題になつております吉野ヶ里遺跡、あるいは耶馬台国も小国家の一つに違ひないのですが、地域をどんどん自己の支配下に置いて耶馬台国のような小国家が成立するとともに、その王は、それぞれの集落ごとの収穫祭よりももつと上に位置する収穫祭を主宰するようになります。

すなわち、小国家の王は、より大きな権力を持ち、祭司として収穫祭を執行し、小国家を守っている神と一体化することによって、その地域の王としての権力を保持したわけです。

ですから、毎年それをとり行うということは、王としての権力を再生していくという儀礼であり、「反復される即位式」ということが考えられます。

以上が、新嘗祭以前の稻のお祭りです。

これが時代とともに性格が変わつてまいります。当時は「大王」と呼ばれていましたが、天皇が稻の収穫祭、後の新嘗祭をとり行うわけです。その年その年にこのお祭りが行われるたびに、穀物の神あるいは皇祖神と交流し、神と一体化していった。これが新嘗祭の原形になります。

当時は祭政一致で、天皇は政治的な権力者であるとともに、その国の最高の祭司として、こういうお祭りを執行するものが重要な仕事でありました。天皇というのは、本来そういうものであるということです。

後に『古事記』『日本書紀』という神話がつくられ、天皇が日本の国を政治的にも宗教的にも支配するという、両面からの基礎づけによつて、初めて天皇が当時の日本を統治することができるようになりました。

次に、現在行られている新嘗祭についてお話しします。

現在、宮中で行われている新嘗祭の原形は、民間の「新嘗」（にいなめ）という言葉から始まっています。国語学的に見ますと、

稻を食べる祭りで、これを新嘗というのだそうです。

新嘗祭の記述が一番最初に出てくるのは、神武天皇のときに既に新嘗祭と見られるお祭りが行われたということは言われていますが、制度化された新嘗祭が存在したのは、二十二代の清寧天皇ではないかと言われています。

践祚と即位が未分離の時代があつたと言いましたが、最初のころは新嘗祭と大嘗祭も区別されていませんでしたが、それが区別されたのは、天武天皇の時代であります。この時期に、毎年行われる稻の祭りは新嘗祭、即位して初めて行う、一代に一回しか行えない新嘗祭を大嘗祭と言ったわけです。

十一月二十三日は勤労感謝の日ですが、もともとは新嘗祭が行われたことから、制定された祭日であります。現在、祝祭日とされているものに、建国記念日とか文化の日などがありますが、一般的に宮中の祭祀から始まったものが多いわけです。

ところで、新嘗祭が祭日として決まつたのは七〇一年の大宝律令で、十一月の下の卯の日とされ、卯の日が月に三度ある場合は、真ん中の卯の日と定められております。

新嘗祭は本来『古事記』『日本書紀』の神話、すなわち、高天原で皇祖神・天照大神は保食神から五穀の種子を得た。五穀といえば米、麦、粟、稗、豆です。これを高天原のサダ、サナダにまいて収穫し、これを原種とした。後に天孫降臨のときに天照大神は皇孫である瓊杵命に授けるという記紀神話に由来して、稻の種を受けた皇祖神の天照大神の神恩に感謝し、天神地祇とともに収穫した穀物を食べるという行為によって、天皇の徳を増す祭りであります。新嘗祭は、平安京大内裏の中間にあら中和院の正殿「神嘉殿」でとり行われます。

この新嘗祭の前夜に、鎮魂祭（たましづるまつり）という重要な儀式があります。これは「みたましづめ」と「みたまふり」という二つの儀式から成っております。

「みたましづめ」は、天皇の靈魂を身体の中央にしっかりと鎮め、「みたまふり」は身体の中心に鎮めている天皇の

靈魂を振り起こして、天皇の靈力を再生させ強める呪術的儀礼だそうです。

「新嘗祭には二つの重要な儀式があります。

一つは神饌の供進であります。これは悠紀田、主基田の二カ所の斎田で収穫されたお米をもとにして、いろいろな駄走をつくるわけです。お酒もつくります。それを天皇みずから天神地祇にお供えします。

もう一つは直会であります。これが大切な点ですが、天皇は神と対座し、お供えした新穀、新酒をいただきます。

新嘗祭は夕方から悠紀殿で「夕ノ儀」が行われ、深夜、主基殿で「曉ノ儀」を行い、明け方に新嘗祭の儀式が終ります。

新嘗祭は、先ほど述べたように、卯の日に行われますから、翌日は辰の日です。この日は、大内裏の朝掌院の隣にある豊樂院で、豊明の節会を催します。いわゆる饗宴であります。新穀でつくったお酒、食事をします。

繰り返しますが、もともと稻の収穫祭に起源を持ち、記紀神話を由来とする新嘗祭は、天皇がその年に収穫された稻を皇祖神である天照大神を初め天神地祇に供え、天皇みずからもそれを食する儀式であります。これは、古代から現在に至るまで、天皇が行う祭祀の中心をなすものです。そして、即位をして初めて行う新嘗祭が大嘗祭であります。したがって、大嘗祭は、一代に一度だけ行われるわけであります。

#### 四

その内容は、新嘗祭と同じであります。大嘗祭の場合は、その以前に次のようないろいろな行事があります。

一、まず国郡ト定であります。これは龜トといって、龜の甲羅を焼き、その割け目によって、大嘗祭で使う穀物をとる斎田を決めるわけです。昔は、京都を中心にして、東のほうに悠紀田、西に主基田を決定しました。

二、検校行事定。これから祭りの職につく人たち、あるいはこれからどういうようやつていこうかという

ことを決定いたしました。

三、大祓使。八月上旬。

四、由加物使の派遣。八月上旬。由加物使は、神に供えるものを入れる斎籠物の製造・運搬などを監督するため地方に派遣される使者です。

五、奉幣使の派遣。八月下旬。奉幣使派遣というのは、各神社、御陵に奉幣使を派遣して、大嘗祭をとり行う旨を奉告します。

六、抜穂使の派遣。八月上旬。神に供える稻穂を、抜き穂田から取るために派遣される使者です。

七、神服使の派遣。九月上旬。

八、荒見川祓。九月下旬。大嘗会に奉仕する者が身の汚れを除くために、陰曆九月晦日に京都紙屋川で行う祓。

九、御禊。十月下旬。

十、由奉幣の派遣。十一月上旬。

最後のほうになりますと、お祓いをしたり、十月の下旬になりますと天皇自身が禊みそぎをします。こういったところが、

大嘗祭以前の特に重要な行事であります。

大嘗祭は新嘗祭より規模の大きいものと考えていただければいいと思います。特に大切な内容は神饌の供進と直会であります。

この大嘗祭は、まず卯の日に、新嘗祭と同じような行事が行われ、辰、巳の両日には悠紀・主基の節会、そして、午の日になって大規模な豊明節会（饗宴）と、四日間にわたって行われます。

ところで、お手元に差し上げた資料は、大嘗祭の中で非常に大切だと言われている「寢座」に関する昨日（三月二十九日付）の『朝日新聞』の記事です。

## 「寝台」の意味めぐり論争

### 大嘗祭の「秘儀」若手の論文で波紋

今年十一月二十二日夜から翌未明にかけてとり行われる大嘗祭（だいじょうさい）で、中心的な舞台となる悠紀殿（ゆきでん）と主基殿（すきでん）にしつらえられる寝台は、天皇が入るためのものなかどうか。学者たちが火花を散らしている。昭和天皇の大嘗祭が行われた昭和三年、民俗学者の折口信夫が、天皇自身が寝具にこもって「天皇靈」を身につけるためのもの、と唱えて以来の「定説」に対して、折口学の影響が強い国学院大学の若手歴史学者が真っ向から否定する論文を発表したのがきっかけ。寝台は歴代天皇だけが伝える「秘儀」の核心だけに、大嘗祭の性格づけとからんで、論争には当分決着がつきそうにない。

（中略）

大嘗宮の悠紀殿、主基殿の内陣で天皇が自ら行う儀式は「秘儀」とされ、律令の儀式細則にも記録が残っていない。ただ、両殿の内陣のしつらえ方については、内陣中央に八枚の畳を重ねた寝台が設けられ、その上に衾（ふすま—寝具）や单（ひとえ）が置かれ、坂枕（さかまくら）の枕元に櫛（くし）、足元に沓（くつ）、右脇（わき）に打ち払い布が添えられるなどの記録が残っている。また、儀式の中身については、平安後期の学者大江匡房が儀式書「江家次第」や日記に、天皇が寝台の右脇の座で伊勢神宮の方向へ新穀を供え、自らも食べる手順を記している。しかし、中央の寝座に関しては何も触れられておらず、大きななぞとされてきた。

折口信夫は、寝具は天皇がくるまつて天皇靈を身につけ「完全な天子」として再生するためのものであるとしているのでありますが、国学院大学の岡田莊司助教授が「国学院雑誌」平成元年十二月号（今年一月発刊）に発表した「大嘗祭——『真床覆衾』論と寝座の意味」という論文によりますと、

大嘗祭で天皇の祭儀を手伝つたり見聞きした人たちの記録——①一三七五年の後円融天皇の大嘗祭を記録した

一条良基の「永和度大嘗会記」②一四一五年の称光天皇の時の関白一条経嗣の「応永大嘗会記」③ト部兼豊の「宮主秘事口伝」④関白一条兼良「代始和抄」——などにも、天皇が寝具にくるまつたという記述はないと指摘。

また、皇室祭祀（さいし）をつかさどったト部（うらべ）の人たちが日本書紀を研究した文献にも、天孫降臨神話の真床覆衾を大嘗祭の寝座の結びつけてる見方は全くない、としている。

というわけです。そして彼の結論としては、「天照大神を迎えて休んでもらうためのもの」というわけです。

この寝台に関することは、天皇ひとりが関連することで、我々のうかがいしれないところにあるわけです。

## 五

最後に、大嘗祭における仏教観について、江戸時代の史料によって、その一端を紹介してみましょう。元文度（一七三八）の大嘗祭が近づくと、宮中をはじめ京都市内に様々な触が出されました。

まず、宮中に出された触から見ていきますと、宮家や公家に次のような内容の触が出されました。

第一に、「大嘗祭が終了するまでの約一カ月間に及ぶ神事中には、前回の貞享度（一六八七）と同様に「忌詞」、すなわち「忌み言葉」が使用されるというのです。

それを見ると、仏教関係の語は、

- ①「仏」を「中子（なかご）」という（仏は寺の中心に安置されていることから）。
- ②「寺」を「瓦葺（かわらぶき）」という（瓦で屋根を葺くのは、宮殿や寺院に限定されていたことから）。
- ③「經」を「染紙（そめかみ）」という（お経の料紙は染紙を用いることから）。
- ④「塔」を「阿良々岐（あららぎ）」という（塔の形状が草のアララギに似ていることから）。
- ⑤「僧」を「髪長（かみなが）」「尼」を「女髪長（めかみなが）」という（共に反対語を使う）。

⑥「堂」を「香燃（かうたき）」という（仏堂が香を燃いて礼拝する所から）。

⑦「優婆塞（うばそく）」を「角筈（つのはず）」という（男性の仏教信者の髪の形から）。

と、以上のように、直接的表現を避けたり、反対語を使用していました。

第二に、僧・尼・法体の者の宮中への参内は禁じられていました。しかし、俗人風を装えば、許可されるのです。

第三に、忌服中の者や不净の者は参内することが禁じられていました。それは先ほどの「忌詞」にも見られます。

①「死ぬ」を「奈保留（なほる）」という（反対語を使用する）。

②「病（やまい）」を「夜須美（やすみ）」という（病臥を休息の状態と見る）。

③「哭（なぐ）」を「塙垂（しおたる）」という（死者を哭くこと）。

④「血」を「阿世（あせ）」という。

⑤「打つ」を「撫（な）でる」いう（反対語を使用する）。

⑥「墓」を「壙（つちくれ）」という（墓は土を盛り上げたものだから）。

⑦「斎（とき）」を「片膳（かたしき）」という（古来、一般人は一食であったが、持斎者は一食であるところから）。

⑧「宍（しし・獸肉）」を「菌（クサヒラ）」という（「菌（きのこ類）」が山でとれるところから）。

第四に、寺院において鐘をならすことを停止し、京都市中の東西南北四方の禁止地域を設定しています。

以上の点を見てみると、大嘗祭の触の根底には「排仏觀」と「排穢觀」が存在することが注目されます。すなわち、

前者は第一点・第二点・第四点から、後者は第三点からそのように考えることができます。

この注目すべき「排仏觀」と「排穢觀」は貞享度の大嘗祭に際して、京都妙法院門跡の堯惣法親王（後水尾天皇の皇子）が記述した日記によってもうかがうことができます。

①神事のため、僧尼が宮中に出入りすることは禁じられ、僧と同様の姿をしている医師は衣冠を着して参内し、老年の医師などは急に付け髪をしているので笑ってしまう。

②宮中の屏風・障子でも、僧の姿が描かれていれば撤去し、できなければ張紙をする。

③神事のため、寺院の鐘は停止。

④哀傷歌や僧が詠んだ和歌を収めているので「古今和歌集」をはじめとする歌集を、天皇は御覽にならない。

このように皇族であり、僧侶でもある堯惣法親王は仏教色を全て払拭している大嘗祭を批判し、皮肉っています。

次に、京都市中に対しても宮中と同じような「排仏觀」と「排穢觀」を明確にしている触が、ぞくぞくと出されています。

このことは、日本古来からの「神道」と外来宗教の「仏教」との対立から生じる「排仏觀」と、大嘗祭が朝廷儀式第一の「神事」であるところから、不淨を積極的に排除して、忌み慎むという「排穢觀」の重視が明確化されています。

そして、翌々年の元文五年（一七四〇）に再興された新嘗祭、延享元年（一七四四）に再興された宇佐・香椎奉幣使にも同様の観点が見い出されます。

更に、こうした観点はすでに古代から流れしており、明治の神仏分離令の遠因になるものではないかと思われます。きょうは、践祚、即位礼そして太嘗祭について、その基本的なことをお話ししました。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

\*本稿は、平成二年三月三十日現宗研主催で行った現代宗教研究セミナーにて講演されたものを要約したものです。